

## 「新聞うずみ火」8月号と大阪日日新聞

「新聞うずみ火」8月号の巻頭(表紙)「大阪万博できるのか」という見出しの横に、私のデカ顔も写っている。「夢洲を万博会場にした維新の責任は大きい」と話す山田さん、と紹介されている。万博のインタビュー記事が巻頭を飾るとは、うれしいことだ。

7月18日午前、大阪府咲洲庁舎(記事では此花区となっているが、住之江区)1階で、うずみ火編集部の取材をうけた。開幕まで1年9カ月を切る大阪・関西万博について、会場の夢洲特有の地盤などに関わらせ、会場建設工事の遅れや地元負担膨張の構図について話した。万博だけでなく、夢洲IRカジノ誘致にも暗雲が立ち込めていることを指摘した。インタビュー記事には、私の発言がうまくまとめられている。

私の発言から。万博開催後には撤去される350億円の建設費(あくまで予定)の大屋根。「組み立てが始まったと報道されましたが、地盤がゆるいので土台をコンクリートで固め、その上に木を組んでいるのでしょう。大量の材木を確保できるのか、安全性を確保できるのか、バリアフリーはどうなっているかなどの情報は開示されていません」「工事車両のアクセスも悪く、軟弱地盤で難工事が予想される。直下型地震に襲われたらひとたまりもない。夢洲では集客施設と物流の併用は無理なのです」

このあと最上階の展望室から夢洲を眺めるつもりだったが、連休明けなので閉館していた。私が提案して、43階に直行した。ここは万博協会のフロアで、



団体協議のために何度も来たことがある。万博協会の事務所はなんだか閑散しており、開催まで「635日」という掲示板がやけに目についた。

大阪日日新聞28日「淀まず続ける大阪の現場から」に注目した。大阪の現在を丹念に取材している木下功記者は、「大阪の現場」のさいごに、新聞うずみ火を取りあげた。大阪日日新聞は惜しまれながら今月末で休刊する。うずみ火8月号で、木下記者はやり残したことは「大阪IR・カジノを見届けたかった」と。同紙のコラム「潮騒」が楽しみだったという読者は「万博やカジノを巡る問題はこれから正念場だけに、大阪の地方紙がなくなるのは残念です」と。この読者は、たぶん私だろう。

「泣いている人に寄り添う」という、うずみ火の姿勢に、同感することが多い。反戦・反差別を訴え続ける月刊のミニコミ紙「新聞うずみ火」。ジャーナリストの黒田清さんの遺志を継ぐ矢野宏さんと栗原佳子さんが仲間たちとともに18年間、途切れることなく毎月発行し続けている。創刊は2005年10月。郵政選挙で自民党が圧勝した年で、「憲法が悪いように変えられるのではないか、その時に何ができるのか」と考え「小さいけれど新聞を出していこう」と決断した。

(2023年7月31日)